

平成 22 年度 第 2 回 石狩市社会教育委員の会議 議事録

(要点筆記)

日 時 平成 22 年 11 月 4 日 (木) 午後 1 時 30 分 ~ 3 時 30 分

会 場 石狩市公民館第一研修室

出席者 委員長 : 徳田昌生

副委員長 : 村中誠治

委員 : 加藤忠廣、山根利子、伊藤美由紀、青木昭子、古村えり子、伊井義人、
畑中純子

事務局 生涯学習部 : 部長 三国義達

施策推進担当 : 参事 東 信也 主査 吉田雅人

社会教育課 : 課長 清水 雅季 主査 板谷英郁 主任 齊藤幸古

社会教育主事 松永 実

会議内容

1. 教育長あいさつ

市は、総合計画の進行管理や市民の意識を把握するため、2千人の市民に対して、アンケート調査を実施し、回収率は、37.7%でした。社会教育に関連する設問で、いしかり砂丘の風資料館等を見たかについては、前年度から2%減の20.2%、自ら進んで芸術・文化、ボランティア、趣味・教養などの学習活動を行っているかについては、3%増の37.2%となっていました。

自主的学習については、市民カレッジの受講生が大変増えていることや、社会教育に関する講座が充実されていることなどがこのような表れであり、社会教育全般において、委員の方々にいろいろなご意見を頂いて進めている結果だと感じています。

社会の要請、子どもの居場所、地域や家庭との連携、子どもの生活習慣などは、市の課題にもなっており、今後も力を入れなければならないところと考えていますが、この部分については、当委員会でも8月9日に独自に勉強会を開催し、ご提言を頂けるとお聞きしております。

現在、23年度の予算時期ですが、教育委員会が抱えている課題や今回のご提言につきましても、教育委員会においても検討しながら対応させていただきたいと思っていますので、よろしくをお願いします。

2. 委員長あいさつ

第1回目の会議終了後、8月9日の意見交換会では、お休みの土曜日に集まっただき、また、活発な意見交換会で提言に結びつけることができたことに、お礼申し上げます。

教育長から市民アンケート結果のお話が出ていましたが、現在、道立生涯学習推進センターで生涯学習に関する住民の意識及び社会教育行政の実態調査ということで、アンケートが実施されています。社会教育の推進にかかわることや今日的課題となっている市町村合併による地域の広域化の課題に社会教育行政がどう取り組むかという内容で、結果については、今年度中に出てくるかと思われます。

また、地域の教育力向上のための方策に関する調査で、「つながり」「意識」「交流や活動の場の機会」の3つの視点から地域教育に取り組んでいるまちの事業内容を把握し、北海道全体

の今後の施策に活かしていくものとなります。

もうひとつのアンケートは、北海道社会教育連絡協議会で社会教育委員の意識調査が行われることになっています。全道社会教育委員の中から5人が企画委員としてアンケートを作成していますが、私もそのメンバーとして、アンケート内容の検討を行っており、今後、皆さんにご回答をお願いすることとなります。

社会教育に関して今一度見直して、今後の方向を探ろうという点から、いろいろな調査が進められています。そのような視点から、本会議においても、今年度から家庭教育、地域教育、子育て支援の観点を絡めて議論しておりますので、よろしく申し上げます。

3. 報告

(1) 会議・研修報告

第50回北海道社会教育研究大会について（釧路大会 8/26・27）徳田委員長

釧路市生涯学習センター（まなぼつと幣舞）で開催され、私と西山社会教育主事の2人が参加しました。全道の社会教育の様々な実例を知ることができた研修会でした。全国社会教育委員連合常務理事の坂本登氏の基調講演「今こそ社会教育力を！～社会教育委員がその中核に～」では、新しい公共について話されましたが、「新しい公共」は特に新しいわけではなく、以前からあったことが、今取り上げられているということでした。その他、今の子ども達は、同年齢のコミュニケーションが中心になっているので、異年齢集団へ移行すべきだということや、自然体験、就労体験、参加体験・自主的集団体験などが欠けていることを指摘されていました。午後は、6分科会に分かれて討議しました。私は、時代の変化に対応した社会教育活動の分科会に参加し、各地域の取り組みや考え方などを学ぶことができました。2日目は、金子みすゞ記念館館長矢崎節夫氏の講演で、子どもや保護者に聞いてほしいと思う、心打たれる内容でした。

平成22年度石狩管内市町村社会教育委員等研修会（北広島市 9/29）村中副委員長

基調講演として酪農学園大学松本教授「元気なまちの元気な市民活動」があり、石狩管内からは、40人が参加しました。地域の元気な市民活動というのは、テーマが明確で、達成意欲があり、参画の場が多く、情報を共有化してみんなが分かるもので、自由度が高く、コミュニケーションを大事にし、正しい評価（認める・ほめる）が行われるもので、これらを押さえて進めていくことが大切だということでした。

レクチャーは、社会教育の自主性・多様性・公共性という内容でした。おらがまちの自慢ということで、突然話す場面もあり、石狩は、豊かな自然や一次産業が素晴らしく、新港があるなど自分なりにいろいろと自分のまちについて考える機会となりました。グループワークでは、地域課題を解決するために、実際に活かされる社会教育の事業企画書を作るということで、発表し合いました。自分たちのグループは、母子家庭の子供に対して、父親体験をどのようにしてもらおうかということをお話ししました。

4 議事

徳田委員長：本日、石狩市の社会教育の推進に関する提言（その1）の内容について議論し、方向性についてまとめ、その後、具体的なことについて詰めていければと思います。この提言書についてご意見がありましたらお願いします。

伊井委員：今回の提言は、石狩の寺子屋の具体的なことを作らずに、大まかな方向性を提言するということになるのですか。

徳田委員長：はい。どこで、どのような形で行うのかという具体的なことについての議論までに至っていないので、今まで議論した内容を資料として付け、今回は、今後の方向性として提出したいと思っています。この提言で承認されれば、今後、予算なども必要となるので、具体的なことを行政とも詰めながら進めていくことになると思います。三国部長からこれらについて、何かお考えなどありましたらお願いします。

三国部長：春から皆様にいろいろご議論いただき、早ければ次年度からの事業化も含めた具体的取り組みの検討と提言をしていただくことになりました。今後は、社会教育委員の皆様と教育委員会の委員の方々とこれらについて別途ご議論をしていただき、その具現化に向け、予算の組み立てなども視野に入れていきたいと思っています。

徳田委員長：寺子屋の方向で、提言していきたいと思っています。子ども総合支援会議の「確かな学力」という部会でも、この寺子屋を提言していますので、寺子屋事業が2か所から提出されることになるかと思っています。

古村委員：具体的なことは、まだ議論されていませんが、「持続可能な制度」となると、やはり予算も伴うことになるかと思っています。その点は大丈夫なのでしょうか。予算や規模などは、どのくらいになるのでしょうか。

徳田委員長：意見交換会の中でもいろいろ出されましたが、結果的に参考資料の4-2の総合的な子ども支援システム(仮)「寺子屋あいかぜ」を念頭において、方向性を提言することとなります。予算や場所などの具体は、今後の議論になっていきます。

村中副委員長：一挙に広げるのではなく、1か所などで試験的にいき、その成果に基づいてやる方が良いのではないのでしょうか。

徳田委員長：いろいろな寺子屋があると思いますが、その制度のたたき台となるような案があるようなので、三国部長からご紹介していただきたいと思っています。

三国部長：これまでの皆様のご議論の中では、勉強だけでなく、文化活動や共同で様々なことを経験し合う場として出されていました。そこで、花川地区1か所と厚田浜益1か所で行うことが考えられます。現在、厚田浜益で、放課後子ども教室が月1回のペースで行われているところがあり、学校や地域によっては、増減が必要なところもありますが、少年団の活動の隙間に、放課後子ども教室の拡大版として、この寺子屋制度を入れ込むことができるのではないかと思います。花川地区で行おうとすると児童館や学校を使用する方法があり、今回は、スペースがある学校で行うのもよいかと思います。現在、文部科学省の委託で、学校支援地域本部事業をやっており、コーディネーターが配置されています。地域のボランティアを募集し、学校で依頼された書道講師の派遣や清掃、花壇の整備を依頼するなどの調整をしています。次年度からは、委託ではなく、補助事業となりますので、このような事業と併せて、新たに財源を作り、事業を展開することもできるのではないかと思います。今後、皆様のご議論と財源とを合わせて具体のプログラ

ムを作り上げ、また皆さんのご意見を頂ければと思います。

徳田委員長：具体のことはまだ決まっていますが、今のお話のように、2か所位が適切ではないかと思います。道立生涯学習センターで出されている社会教育の推進にかかわる今日的課題においても地域の広域化への対応が求められており、石狩でもどう進めるかということになりますので、花川地区1か所と厚田浜益地区のどちらか1か所でモデル的に進める方向が妥当ではないかと思います。この点について何かご意見あればお願いします。

伊藤委員：以前、土曜日に学校を借りて、地域のボランティアが地域の子どもたちに遊びを提供する「地域子ども教室」を開催していました。今の内容を伺うと、名前と場所を変えて、同じようなことをするということになるのでしょうか。

徳田委員長：私も以前、土曜日に紅葉山小学校の地域子ども教室で、科学実験のボランティアとして活動したことがあります。いろいろな寺子屋の形が考えられます。毎日がいいのか、場所はどこがふさわしいのか、スペースが使用できるのかななども考えていくことになるかと思います。

村中副委員長：花川地区ですと、居場所がない子どもや、共働きの多く、家庭で勉強をしたくても分からなくて結果的に勉強できない、そのようなことを考えると、子どもが安心していられる場所づくりや子どもたちが参画して仲間意識が持てるようなことをするなど、家庭で欠けている要素を補えるような寺子屋になるかとイメージできます。しかし、厚田や浜益地区になると少年団に入っている子が多く、自然体験、伝承文化的な体験もしています。また、スクールバスを待つ間に、勉強をしているようで、帰宅すると、1か所に集まるのは難しいなど、寺子屋のイメージが湧きません。現在、厚田・浜益の小規模校と花川地区の大規模校の交流が進んでいるようで、そういう支援や短期宿泊学習などの体験学習で学校を借りるイメージはできますが、花川地区と同じような寺子屋にはならないのではないかと思います。2つ同時に進行するよりは、まずは花川地区で行って、厚田浜益地区は別の形で支援していくほうが良いのではないかと思います。

徳田委員長：厚田区浜益区の現状に合わせて、必要な支援を補完しながら、総合的な寺子屋をやっていくということで、よいのではないかと思います。

畑中委員：浜益になるとまた違うと思いますが、厚田の望来地区では、毎週水曜日、下校時間が早くなります。この日は、少年団もありません。現在、望来保育所の建物を利用して、児童館のような子どもの集まる場所になっています。週2回、お母さんたちのボランティアで行っており、午前は、0～3歳未満児の子どもを対象とした親子が遊んでいます。水曜の午後は、スクールバスに乗っている8～9割小学生の子どもたちがここに降りて、宿題をしてから、それぞれ好きな遊びに入ります。望来の子どもたちの特徴をみると、市のいろいろなイベントの誘いがきても、参加する子は少ないです。決まったメンバーの中で生活することが多く、大勢の中に入ることは、とても不安で勇気がいります。大規模校との交流がありますが、人数の多さに圧倒されて泣きだしてしまう子もいたようです。田舎の子を主体とするならば、自分たちの所に都会の子が来る方が良いかと思います。

徳田委員長：1か所に集まって勉強をする方法や、別の地区の子どもと交流する場を設けるな

ど、いろいろな方法があるかと思います。寺子屋事業でできること、効果のあるものから取り入れていったら良いのではないかと思います。

加藤委員：方向性は良いと思います。少年団のようなものがあるのか、寺子屋があるのか、いずれにしても、子どもたちに何を体験させたいかということが、大切になると思います。今の子どもに不足しているコミュニケーション能力を手助けするものや、将来生きてくるものを提供できるものであれば良いのではないかと思います。すぐにうまくいくものではないと思いますが、試行錯誤しながら良い方向になればいいと思います。

徳田委員長：子ども総合支援会議においても中高学生の子どもの居場所づくりについて議論されていますが、少年団も子どもの居場所になっているようです。寺子屋事業は、子どもが成長していくためにいろいろな要素を含んだもので良いかと思います。

伊井委員：方向性は良いと思いますが、案件を明確化しなければ、話が広がってしまうのかと思います。2点感じたことですが、対象は、誰なのか。幼稚園児から高校生までを含めるのか。もう一つは、放課後子ども教室や放課後児童会など類似した活動が既になされており、できればそれらをすみ分けした方が良いのかと思います。いろいろな組織が立ち上がっていて、類似したものになると、非効率的になるのかと思いますので、今まで活動していなかったこと、目指していなかったことが良いと思います。例えば、児童会はコミュニケーション能力を中心にしているならば、寺子屋は勉強にするとかか、社会教育なので、学力だけとなると、どうかということもありますが、何かしらの一つの柱、目標をもった方が、既存の事業との違いが明確になり、今後、予算を取る場合でも、事業を進めるにあたってもやりやすのではないかという気がします。

徳田委員長：一つの柱をもつという今のご意見は、ごもっともだと思います。今後、進めていく中でどう整理し、どう特徴づけるか、予算なども含めて出てくると思います。皆さんと議論を重ね、具体は決まっていますが、総合的な子どもの支援システムの寺子屋ということで、提言してよろしいでしょうか。

委員一同：承認します。

徳田委員長：ありがとうございます。

古村委員：子どもの実情や要求に応じて、勉強を教えたり、楽しい活動を取り入れたりしていくということで良いと思います。

山根委員：小学校の子どもを持つ近所の保護者の方は、北海道の子どもの学力が落ちていることに、やはり不安を持っているようです。しかし、家庭では、勉強を見てやる時間もないし、親が勉強を教えるほどのものを持っていないなどの声があり、このようなシステムは、とても良いことだと思います。

加藤委員：塾のようになってしまわないでしょうか。

山根委員：そのようなことも考え、心配になりましたが、どうなのでしょう。

伊藤委員：石狩の子どもの学力が落ちていることに、地域の人たちがいろいろな対策を考えようとしていますが、子どもを抱える当事者の保護からは、学校以外で学力を上げたいという声が上がっていないのは、どうしてなのかと疑問に思います。学力をつけたいと塾に通える子は、塾に行っています。本当に学力を上げたいと思っ

ているならば、塾に通わなくても、放課後に学校で勉強を教えてほしいなどの、保護者からもっと声が上って、反映されていたのではないかと思います。地域で心配し、そのような場所を作っても、果たして子どもは来るのだろうかと心配になります。

古村委員：石狩市の通塾率は把握していますか。

東参事：全国学力テストの設問に、塾に通っているかという内容はありますが、数値は、今、手元にありません。

古村委員：塾に行くほどではなく、または塾に行けずに、勉強をしたくても分からなくて困っている子がいると思うので、そのような子たちを支援できればと思います。厚田あたりは、どうなのでしょう。

畑中委員：厚田は、塾がないので、自分で勉強するか、通信教育などで勉強しているのだと思います。この寺子屋事業ですが、対象は、子どもと限定しているのか、それとも家庭教育の一環として保護者も含めているのでしょうか。

徳田委員長：これまでの議論では、子どもが対象で、地域の大学生や高校生などもボランティアとしてかかわってほしいと想定しています。双方に学びがあり、相乗効果があると思います。保護者も間接的にかかわりがあるわけですが、今のところ保護者は対象としていません。学力向上という点では、市の子ども総合支援会議や教育プランでも掲げており、保護者のニーズがなくても、子どもの現状を考えると、子どもたちが将来社会で困らないように、地域や公の立場から考えてあげるのが良いと思います。石狩の子どもたちに基礎的な力をつけることができるような寺子屋支援ができればと考えます。

伊藤委員：先日、子どものイベントがあり、子どもたちが買い物体験をしました。その中で、子どもたちは、注文や代金、お釣りの計算など、人とのやりとりの中で、様々なことを学んでいました。やはり、学力だけでなく、生きる力にかかわるようなことも大切だと思います。

畑中委員：学力だけだと最初から参加したくない子もいるのかと思います。教え方も大切で、子どもが楽しく学べるのが良いと思います。ここでいう生きる力とは、子どもがいろいろな経験ができる場で、特に田舎の子どもは、音楽や物づくりなどの本物に触れる機会、体験が少ないので、そういう場があると、興味をもてるのかと思いますし、保護者もそのような場だと行かせたいと思います。

徳田委員長：総合的な寺子屋をすることで、結果的に学力も生きる力もついていくと思います。

青木委員：子どもたちは、楽しければ勉強もついていきます。寺子屋はいろいろな学びができる場がよいと思います。私どもでは、インターシップを受け入れています。実際に子どもとかかわり、その楽しさを知り、いろいろなことを学んでいきます。寺子屋においては、ボランティアの学生も学ぶことがありますし、子どもたちの基礎学力や必要な学びを提供できる場となれば良いかと思います。

古村委員：子どもによっては、学校で「勉強が分からない」と言えない子もいるのではないかと思います。そのような子どもにとって、寺子屋に行けば「分からない」ということも言えるような安心感のある場になればいいと思います。

徳田委員長：寺子屋は、塾のようなものではないですが、勉強が分からない子に力をつけるこ

とや、子ども同士教え合ったり、切磋琢磨したりしながら、コミュニケーションが深まるようなこともイメージしており、結果的には生きる力にもつながっているものとなります。基本線としては、確かな学力を考えながら生きる力をつけていくのが良いかと思いますが、いかがでしょうか。

村中副委員長：学力の底上げではなく、学校から子どもが帰ってきて、安心する居場所があり、そこで友達を見つけ、いろいろな体験をし、楽しく学び、その中で生きる力や基礎学力をつけていく寺子屋であれば良いかと思います。学力ばかりに目を向けるのではなく、冒頭で紹介された金子みすゞの詩にもあるように、いろいろな子どもがいて、自分の良さを生かしながら成長していく子どもを支援していくという体制が良いと思います。

徳田委員長：点数を取るための学力ではなく、基本的なことが分からないことで子どもが劣等感を持ち、結果的には生きる力をなくしてしまうことになりかねないことも考えられます。また、家庭で勉強の時間が持てないようなところにも手を貸していきたいということを思っています。寺子屋については、当面、厚田浜益地区と花川地区の2か所で、生きる力と基礎的学力の二つを念頭におき、具体的なことは、今後詰めたいと思いますが、今日の会議はこれでまとめさせていただきたいと思いますがよろしいでしょうか。

委員一同：はい。

徳田委員長：ありがとうございます。

議事録は上記のとおりであることを認めます。

平成22年11月17日

石狩市社会教育委員の会議委員長

徳田昌生
